

主人公は誰だ?: 『オセロ』 を読む

福 士 航

【要旨】

本公開講義では、『オセロ』における主人公は誰かを考察することを目的とした。このような問題設定をした背景を第1節では紹介した。『オセロ』は台詞を定量的に考察すると、極めて例外的なことに、タイトル・キャラクター（通常は「主人公」）であるオセロの台詞が、イアーゴよりも少ない。通常は主人公がもっとも台詞量が多いものだが、この芝居では悪役のイアーゴのほうがオセロよりも2,000語近く台詞量が多いのである。第2節では、とはいえ、悲劇の主人公という観点から見ると、高位の人間の運命の変転という、アリストテレス以来の悲劇の主人公に該当するのはオセロ以外にないことを確認した。第3節では、『オセロ』の批評史を簡単に振り返った。ヨーロッパ白人にとっての人種的他者が主人公となることへの抵抗感がRhymerの批評からは垣間見える。また、Coleridgeの劇評には、高位の人間が嫉妬という愚劣な感情に動かされることへの反感・忌避感が見て取れる。これらの意見の背後に見えてくるのは、ヨーロッパ白人中心主義的かつ理性中心主義的態度である。この劇の真の主人公が誰かを考えると、ある種の恐怖—白人が非白人に優越などしておらず、実は同様に非理性的な側面を持つと露呈してしまうことへの恐怖—がこれらの意見から透けて見えることが分かる。第4節では、この劇の主題は、非白人のオセロも、ヨーロッパ白人のイアーゴも、ともに嫉妬という感情—「緑色の目をした怪物」—に支配されていることにあることを指摘した。末廣論文にあるように、西洋対イスラムという二項対立の図式に陥らずにこの劇

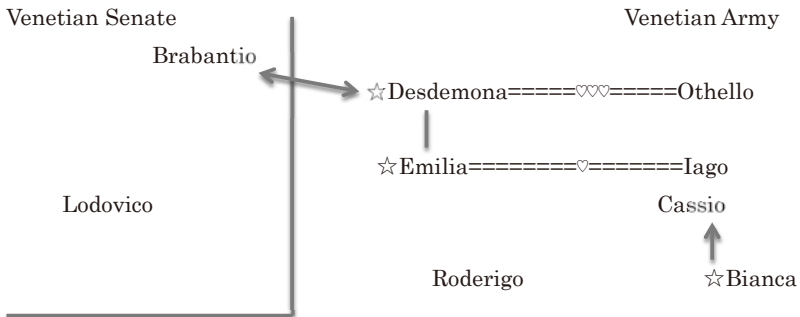
主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

を読むことが、ポピュリズムの嵐が吹く現在には肝要である。進化心理学の知見では、嫉妬は種としての人類に普遍的に備わる情念であるらしい。西洋対イスラムという単純な二項対立を打破する読みを提示するという政治的目的のためには、そうした知見も役立てられるだろう。「緑色の目をした怪物」たる嫉妬こそが、この劇の真の主人公であると、最終的には論じた。

【資料】

- ・本日の講義の流れ
0. 登場人物関係図
 1. 主人公は誰だ? 定量的に
 2. 悲劇の主人公は誰だ?
 3. *Othello* はどう読まれてきたか
 4. 本当の主人公は……

0. 登場人物関係図 *Othello, or the Moor of Venice*



1. 主人公は誰だ? 定量的に

Marvin Spevack, *A Complete and Systematic Concordance to the Works of Shakespeare*. Vol. 3 (Georg Olms : Hildesheim, 1698)

- *Macbeth* : 2,349 lines ; 16,436 words
 - Lady Macbeth : 257 lines ; 1,901 words
 - 10.940 % of lines ; 11.566 % of words
 - Macbeth : 705 lines ; 5,291 words
 - 30.012 % of lines ; 32.191 % of words
- *Hamlet* : 4,042 lines ; 29,551 words
 - Claudius : 550 lines ; 4,081 words
 - 13.607 % of lines ; 13.810 % of words
 - Hamlet : 1,507 lines ; 11,563 words
 - 37.283 % of lines ; 39.128 % of words
- *King Lear* : 3,487 lines ; 25,221 words
 - Edgar : 401 lines ; 2,882 words
 - 11.499 % of lines ; 11.426 % of words
 - Lear : 753 lines ; 5,592 words
 - 21.594 % of lines ; 25.171 % of words
- *Othello* : 3,551 lines ; 25,887 words
 - Desdemona 391 lines ; 2,760 words
 - 11.010 % of lines ; 10.661 % of words
 - Iago : 1,094 lines ; 8,434 words
 - 30.808 % of lines ; 32.580 % of words
 - Othello : 879 lines ; 6,237 words

— 24.753 % of lines ; 24.093 % of words

2. 悲劇の主人公は誰だ?

2-1. Iago?

IAGO. Mere prattle, without practice

Is all his soldiership — but he, sir, had the election

And I, of whom his eyes had seen the proof

At Rhodes, at Cyprus and on other grounds

Christian and heathen, must be be-lead and calmed

By debtor and creditor : This counter-caster

He, in good time, must his lieutenant be

And I, God bless the mark, his Moorship's ancient! (1.1.25-32)

口じゃペラペラ実力はへなへな、それがやっこさんの軍人魂のありったけだ — なのにそいつが選ばれ、この俺は、ロードス島でもキプロス島でも、いや キリスト教国、異教国を問わず、いたるところで手柄を上げ 將軍の目にとまったこの俺が、筆記専門のそろばん野郎の

風下におとなしく引っ込んでなきやならん。あの会計係が まんまと副官におさまって、この俺は、情けないじゃないか、黒い將軍閣下の旗持ちだ。

(松岡和子訳: 以下『オセロー』の訳は同様に松岡訳)

IAGO. I hate the Moor

And it is thought abroad that 'twixt my sheets

He's done my office. I know not if't be true,

Yet I, for mere suspicion in that kind,

Will do as if for surety. (1.3.385-89)

俺はムーアが憎い、世間の噂じゃ、やつが俺の寢床にもぐりこみ

俺のかわりを務めたそうだ。本当かどうかは知らないが、この手のことで疑いがあれば、

主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

確かな事実で通すのが俺の流儀だ。

2-2. Desdemona?

EMILIA. I will be hanged if some eternal villain

Some busy and insinuating rogue,

Some cogging, cozening slave, to get some office,

Have not devised this slander, I'll be hanged else!

IAGO. Fie, there is no such man, it is impossible.

DESDEMONA. If any such there be, heaven pardon him. (4.2.132-37)

エミリア 首くられたっていい、きっとどこかの底なしの悪党が、
おせっかいなおべんちゃら野郎が、
嘘にまみれたベテン師が、いい地位にありつこうとして
こんな中傷をでっちあげたに決まってる。違ったら首をあげる！
イアゴー 馬鹿、そんな男がいるもんか、いるわけない。
デズデモーナ いるとしても、天がお許しになりますよう。

DESDEMONA. A guiltless death I die.

EMILIA. O, who hath done

This deed?

DESDEMONA. Nobody. I myself. Farewell.

Commend me to my kind lord — O, farewell! (5.2.121-23)

デズデモーナ 無実の罪で、私、死ぬの。
エミリア ああ、誰です、こんなことを？
デズデモーナ 誰でもない。私が自分で。さようなら。
私の優しい夫によろしく — ああ、さようなら。

主人公は誰だ?: 『オセロ』を読む

2-3. Othello?

OTHELLO. And say besides that in Aleppo once,
Where a malignant and a turband Turk
Beat a Venetian and traduced the state,
I took by th' throat the circumcised dog
And smote him — thus!

He stabs himself. (5.2.350-54)

それに加え、こうも申し上げる、かつてアレppoの街で、ターバンを巻いたトルコ人が、敵意をむき出しにして一人のヴェニス人に殴りかかり、国を侮辱するのを見た私は、その犬畜生の喉を引っ掴み、こうして一打ちのめしたと!(自らを刺す)



(The 1600 portrait of Al-Annuri, Moroccan ambassador to England)

3. Othello はどう読まれてきたか

Thomas Rhymer, *A Short View of Tragedy*. (1693)

First, this may be a caution to all maidens of quality how, without their parents'

consent, they run away with blackmoors. (cited in *Othello*. Second Norton Critical Edition, 228)

S.T. Coleridge, 'Marginalia on *Othello*' (1819)

Finally, let me repeat that Othello does not kill Desdemona in jealousy, but in a conviction forced upon him by the almost superhuman art of Iago, such a conviction as any man would and must have entertained who had believed Iago's honesty as Othello did. ...Othello had no life but in Desdemona: — the belief that she, his angel, had fallen from the heaven of her native innocence, wrought a civil war in his heart. She is his counterpart; and, like him, is almost sanctified in our eyes by her absolute unsuspectingness, and holy entireness of love. As the curtain drops, which do we pity the most? (cited in *Othello*. Second Norton Critical Edition, 258)

末廣幹「イスラム恐怖を超えて — 『オセロー』とトルコ化の不安のレトリック」(2002)

再び現代における『オセロー』の読解の問題点に戻ることにしよう。すでに指摘したように、現代『オセロー』の人種主義の言説を分析する際に注意しなければならないのは、キリスト教国とイスラム勢力との二元論的な対立、言い換えれば、「文明の衝突」というパラダイムを前提にしないことである。このような二元論は、十字軍の遠征以来、歴史的に連綿と継承されてきたかのように誤解されているが、実際には、二十世紀になって欧米におけるエリート・カルチャーから大衆文化を通じてオリエンタリズムが再び強化されたときに、その時々^々の政治的、社会的状況に応じて捏造されたものにすぎない。この二元論の産物の最たるものが、イスラム教徒はジハードを通じて世界征服を目論む悪魔の使徒であるかのようにみなす^{イスラムフォビア}イスラム恐怖の言説であることは言うまでもない。本論では、こうした二元論やイスラム恐怖の言説はひとまず捨象して、歴史的な偶発性 — 具体的には、エリザベス朝からジェームズ朝にかけての対イスラム外交政策の変化 — を念頭に置きながら、トルコ化の不安が改宗ムーア人であるオセローに投影され

主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

るプロセスを追った。それでは、現在『オセロー』の上演を見る観客やその読者である我々はどのような歴史的な偶発性の下にあるのだろうか。はたして、我々は、イスラム恐怖の言説から自由になれるのだろうか。自刃するオセローが演じてみせるさまざまな人種のパフォーマンスはまさにそうした問題を我々に投げかけているのだ。(133)

4. 本当の主人公は……

デイヴィッド・M・バス『一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 — 嫉妬と性行動の進化論』(2001年 [原著の出版は2000年])

時間の流れのどの時点で切ってみても、生物は、何十万年も何百万年ものあいだ繰り返し行われてきた、この淘汰による進化の営みによって作りだされた形質の集合体であると考えることができる。現代の人間はみな生存と繁殖という仕事に成功した祖先たちの文字どおり途切れることのない長い系列につながっている。彼らの子孫であるわれわれは、彼らを成功に導いた形質を受け継いでいる。これらの形質が適応と呼ばれるものである。(45-6)

嫉妬は、この理論によれば、ひとつの適応なのである。適応とは、進化心理学の用語では、繰り返し起こる生存や繁殖上の問題に対処するために進化した解決策のことである。(14-15)

嫉妬による暴力は北アメリカや、西欧文化や、メディアによるイメージに毒された文化にのみ存在するものではない。ティウイ族 [※オーストラリアの少数民族] にも、ヤノマミ族 [※南米アマゾンの少数民族] にも伝記はなく、ましてテレビなどであろうはずがない。アメリカ文化にしか通用しない説明や、慣習や社会化、西欧の家父長制に根拠を求める説では嫉妬の暴力の世界的な広がりを説明することはできない。(159)

アントニオ・R・ダマシオ『感じる脳 — 情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』(2005年 [原著の出版は2003年])

感情が^{マインド}心と^{ボディ}身体に生じるとき、それは人間的喜びの、あるいは人間的苦悩の表出であるということ。感情は情動につけ加えられた単なる装飾ではない。もつのも自由、捨てるのも自由、といったものではない。(25)

IAGO.

For that I do suspect the lusty Moor

Hath leaped into my seat, the thought whereof

Doth like a poisonous mineral gnaw my inwards...

And nothing can or shall content my soul

Till I am evened with him, wife for wife...

Or, failing so, yet that I put the Moor

At least into a jealousy so strong

That judgement cannot cure ; (2.1. 293-300)

なにしろあの助平なムーアときたら俺の馬の鞍にまたがったことがあるらしい、それを
思うと猛毒ではらわたをかきむしられるようだ……腹の虫をおさめる道はただひとつ、
女房には女房、やつと五分五分になるしかない……そいつがうまくいなくても、せめて
あのムーアを激しい嫉妬に取り憑かせてやる、思慮分別では手の施しようがないくら
いにな。

EMILIA. The Moor's abused by some most villainous knave,

Some base notorious knave, some scurvy fellow.

O heaven, that such companions thou'dst unfold,

And put in every honest hand a whip

To lash the rascals naked through the world

Even from the east to th' west.

IAGO. Speak within door.

EMILIA. Oh, fie upon them! Some such squire he was

That turned your wit the seamy side without

And made you to suspect me with the Moor.

IAGO. You are a fool, go to. (4.2.141-50)

主人公は誰だ?:『オセロ』を読む

エミリア ムーア様は、どこかの札付きの悪党に騙されてるんだ、下劣な名うての悪党に、クズみたいな下司下郎に。ああ、神様、そいつの化けの皮を引っぺがし、正直者ひとりひとりに鞭を持たせて裸にむいたごろつきを叩きのめし、世界じゅう東の果てから西の果てまで追いまくらせて下さい。

イアゴー 外に聞こえるぞ。

エミリア ああ、くやしい！ きっとそういうやつだったのよ、あんたの分別を裏返しにして私がムーア様とあやしいなんて思い込ませたのも。

イアゴー 馬鹿、いい加減にしろ。

IAGO. O beware, my lord, of jealousy!

It is the green-eyed monster, which doth mock

The meat it feeds on. That cuckold lives in bliss

Who certain of his fate loves not his wronger,

But O, what damned minutes tells he o'er

Who dotes yet doubts, suspects, yet strongly loves! (3.3.167-72)

ああ、用心なさい、將軍、嫉妬というやつに。こいつは緑色の目をした化け物だ、餌食にする肉をもてあそぶ。女房を寝取られても幸せに生きていけるのは、それが定めと思
い決め、不倫した女房など愛さない男です。しかし、ああ、惚れ抜きながら疑い、あやし
しみつつ熱愛している男には一分一分が地獄の苦しみでしょうね！

OTHELLO. Fetch me the handkerchief, my mind misgives.

DESDEMONA. Come, come,

You'll never meet a more sufficient man.

OTHELLO. The handkerchief!

DESDEMONA. I pray, talk me of Cassio.

OTHELLO. The handkerchief! (3.4.91-98)

オセロー あのハンカチを持って来い、心配なのだ。

デズデモーナ ね、いいでしょう、あんなに有能な人はもう出てこないわ。

オセロー ハンカチだ！

主人公は誰だ?: 『オセロ』を読む

デズデモーナ お問い合わせ, キャシオーのことを。

オセロー ハンカチだ!

Works Consulted

Shakespeare, William. *Othello*. The Arden Shakespeare. 3rd edition. Ed. E. A. J. Honigmann. Surrey: Thomas Neslon & Sons, 1997.

———. *Othello*. Second Norton Critical Edition. Ed. Edward Peacher. New York: W.W. Norton, 2004)

『オセロー』 松岡和子訳 (ちくま文庫, 2006年)

ダマシオ, アンтониオ・R 『感じる脳—情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』
田中三彦訳 (ダイヤモンド社, 2005年)

バス, デヴィッド・M 『一度なら許してしまう女 一度でも許せない男—嫉妬と
性行動の進化論』三浦彊子訳 (PHP 研究所, 2001年)